Van Laa

オランダの注目のハンドメイド

米国のジャズ奏

◎ヴァン・ラー代表に聞く

マーストリヒトの工房の様子。

た新しいRシリーズは、ベルのカーブがより丸くなっており、抵抗が軽くなります。新発表のB4、B5は以上とは異なるベル形状となっており、よりダークなサウンドが得られることからジャズ奏者により使われています。

ヨーロッパでは、「オイラム」が最も人気を集めています。マリオ・ガッツァニーティというベルギーの建築家のデザインを取り入れて開発したのがこのオイラムで、名称はマリオ（MARIO）の倒語です。オイラムはとても柔軟性があり、ラウドにも、クラシカルにもジャズにも、吹くことができます。フリューゲルホルンには今年83歳になるオランダのジャズ奏者アック・ヴァン・ルーエンのモデル、イタリアのジャズ奏者パオロ・フレスのモデル、そしてアルトゥロー・サンドヴァルのモデルの三つがあります。トランペットには、サンドヴァルのために開発したモデルも含めて三つのモデルがあり、ベルの形状とバルブケーシングがそれぞれ違い楽器の抵抗も異なります。トランペットではオイラムIIが最も好評を博しており、スウェーデンのボー・スタンドバーグのために製作したオイラムIIIはよりダークなことからジャズ奏者に好まれています。

自身のモデルとなる「オイラム/サンドヴァル」のフリューゲルホルンを演奏するアルトゥロー・サンドヴァル。（写真提供：ヴァン・ラー）

――楽器の開発はどのように行われているのでしょうか。

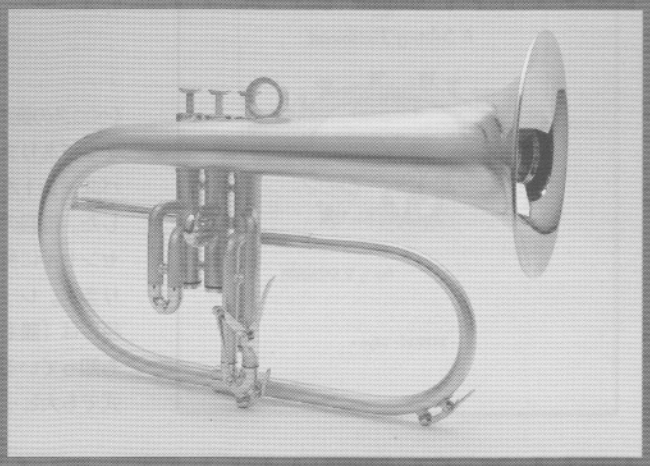
ヴァン・ラーの全てのモデルはプレーヤーたちによって開発されています。例えば、私が楽器に新たな違いを与えようとした場合、具体的にその違いは明言せず、奏者にテストしてもらい、5人以上の奏者が好むようであれば製品に反映するようにしています。私は毎日同じことを繰り返すのではなく、いつも楽器を良くしようと努力しており、私自身が常に学び続けるようにしています。トランペットの製作というのは、説明書を読んでその方法が理解できるというものではありません。

B♭管のトランペットには6種類のベルと12種類のリードパイプを用意しています。その他、C管には3種類のベル、フリューゲルホルンには3種類のベルがありますし、バルブケーシングには合計17種類の組み合わせがあります。

現在、私はコルネットの開発を行っており、来年の発表を目指しています。楽器が完成したら、私の自宅には全てのモデルが1本ずつありますので、それらの楽器と比較をして良いと判断される場合のみ出荷しています。

楽器の設計では、音程とサウンドが歩み寄る妥協点を見出すことが重要です。私はそれを計測するプログラムを持っていますが、完璧な100％の音程を求めようとすると、サウンドが伴わずに問題が生じてしまいます。そのために私は、100％ではなく、80％程度の音程に留めています。

トランペットはプレーヤー自身の感情を表現するための道具です。であるならば、直感的に良いものを選ぶべきですし、数ヶ月をかけて楽器に慣れるようなことではない、と私は思っています。■



アック・ヴァン・ルーエンのモデル「オイラム/アック」フリューゲルホルン。

r Trumpets

メーカー

者から欧州のオーケストラ奏者にまで愛用され……

9月22日にジョイブラスの店頭でボブ・リーブスと共催のクリニックが行われた。全国からユーザーが駆けつけたほか、有名ミュージシャンも多数参加した。

1990年に設立された比較的新しいメーカーでありながら、ハンドメイドメーカーとして急速に注目を集めるヴァン・ラー社の代表に聞く。

記事協賛：真田貿易(有)　取材・構成：吉野和孝　写真提供：真田貿易(有)・ヴァン・ラー社

ヴァン・ラー氏。

――ヴァン・ラーさんの経歴を教えてください。

8歳でトランペットを始めました。その後トロンボーンも演奏するようになり、18歳のときにトロンボーンで入賞したこともあります。10歳のときには楽器を作ろうと思い立っていましたので、機械加工を学んだ後にマイスターとなるために渡独しました。また、ワーキング・ホリデーを利用して半年間、アメリカの有名メーカーでも勉強しました。その後、ドイツのシュトゥットガルトにある小さなメーカーに勤務しました。大きなメーカーよりも小さいメーカーにいたことでより様々なことを学びました。1990年、オランダ南部のマーストリヒトにリペア工房として独立を果たし、10年後にはトランペットを製作するようになりました。

――マーストリヒトで製作を続ける理由は？

マーストリヒトは、ドイツ、フランス、ベルギーに隣接した地域です。アムステルダムなど様々な都市にも近く、多くのトランペット奏者と接することができるのは大変良いことです。例えば、フランスの奏者とドイツの奏者には息の使い方などに違いがありますが、それらは私のトランペットに大きな影響を与えています。また、4年前にドイツのマルクノイキルヘンにもう一つ工房を立ち上げています。ヴァン・ラーでは全てを自分たちで作っており、品質を自身の手で保っています。楽器において重要なのは広告ではなく、品質であることは言うまでもありません。現在、ヴァン・ラーには14人が勤めており、みな家族のようですし、とても信頼し合っています。

――トランペットにはどのようなモデルがあるのでしょうか。

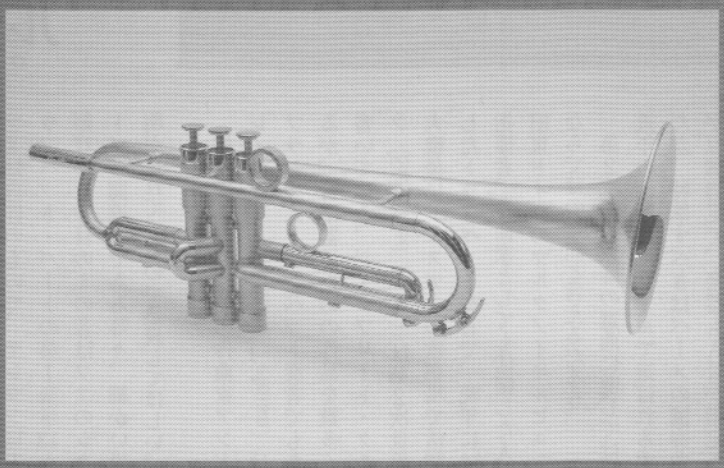
B♭管のトランペットにはB1からB7までのモデルがあります。ただし、B1の1はこの仕様から作り始めたという意味に過ぎず、数字はロジカルにつけられていません。このほか、チャック・フィンドレー・モデル、ボブ・フィンドレー・モデルも製作しています。両者の違いはバルブケーシングにあり、チャック・フィンドレーモデルはエアーが流れるのに対し、ボブ・フィンドレーモデルは抵抗があります。

チャック・フィンドレーとの出会いは、彼がケルンで演奏をしていた際に、26年間使用していたカリキオのトランペットが事故にあってしまい、その修理のためにリペア技術者を探していたところ、私が対応をしたというのが最初でした。その日の夜の演奏までに修理を行うのは難しかったため、工房にあったヴァン・ラーのトランペットを貸し出したところ、チャック・フィンドレーはとても気に入ったのです。その1年後に1週間ほど工房に滞在することになり、彼のモデルの開発を行いました。

――ヴァン・ラーはトランペット以上にフリューゲルホルンが有名ですね。

大手メーカーはフリューゲルホルンのマーケットが小さいため、フリューゲルホルンに投資をしようとしません。しかしながら、フリューゲルホルンは、金管バンドが盛んなオランダではよく使われる楽器です。私は2年をかけて最初のフリューゲルホルンを完成させました。

当初は音程の良さを考慮して設計し、小さいものから大きいものへと順に1、2、3とデザインしました。それぞれベル材質は銅の含有量を変えています。ま



アルトゥロー・サンドヴァルのために開発されたオイラムIIトランペット。